

人生を変えた一冊



磯崎 憲一郎 先生

1988年3月 早稲田大学商学部 卒業
1988年4月～2015年9月 三井物産株式会社 勤務
2015年10月～2016年3月 東京工業大学
大学院社会理工学研究科
価値システム専攻 教授
2016年4月～現在 東京工業大学
リベラルアーツ研究教育院
環境・社会理工学院
社会・人間科学系 教授

磯崎 憲一郎 先生の受賞歴

2007年 『肝心の子供』 河出書房新社刊 第44回文藝賞
2008年 『眼と太陽』 河出書房新社刊 第139回芥川賞候補
2009年 『終の住処』 新潮社刊 第141回芥川賞
2011年 『赤の他人の瓜二つ』 講談社刊 第21回東急文化村ドゥマゴ文学賞
2013年 『往古来今』 文藝春秋社刊 第41回泉鏡花文学賞
2020年 『日本蒙昧前史』 文藝春秋社刊 第56回谷崎潤一郎賞

ご紹介いただいた一冊

1982年度ノーベル文学賞作家
ガブリエル・ガルシア・マルケス
『百年の孤独』

コロンビアの奥地にひっそりと
佇む村・マコンド。この村の開拓
者であるブエンディア一家の栄枯
盛衰を描いた物語。

現実と幻想が入り交じる「マ
ジック・リアリズム」という手法
で世界的大ブームを引き起こした。



ガブリエル・ガルシア＝マルケス、鼓直/訳
『百年の孤独』（新潮社刊）

選んだ本について

Q. 『百年の孤独』との出会いについて教えてください。

A. まず、私は子供のころ**本に興味がなく**て、それより外で遊ぶのが好きだったんだよね。大学でもポート部に入って、本はほとんど読んでなかった。でも**池澤夏樹さんは好き**で結構読んでいて、大学卒業後に池澤さんのエッセイを読んでいたら、『百年の孤独』が絶賛されて、それで気になって読もうと思った。そうしたらもうめっちゃくちゃ面白くて。これを読んでいた時は会社に向かう電車の中だったんだけど、途中の駅で降りて、**仕事を休んで喫茶店でずっと読み続けてしまった（笑）**。それくらいずっと読まなきゃいけないと思わされるような**引力**を感じる本。

Q. どういうところがそこまで面白かったのですか？

A. この本がどういう話か説明してって言われても全然できないんだけど（笑）。一応あらすじとしては、マコンドという村を開拓したブエンディア一族の栄枯盛衰を描いた話。けれど、**内容は何なんだコレは？というエピソードの連続で、そのエピソードがすごく面白い**。例えば、ホセ・アルカディオという男が胸から血を流して死ぬ場面があるんだけど、その血が村の道の流れ、曲がり角を曲がって、家の玄関に入って、母親のもとまでたどり着く。そして母親がそれを見て「あら大変！」って言う。そんな**不思議なエピソード**が続いていく。そこがこの本の面白いところかな。

Q. 『百年の孤独』を読んでどのように人生が変わりましたか？

A. 一言でいえば**大らかになった**。もう1つエピソードを紹介すると、この小説の中で小町娘のレメディオスっていう物凄い美人が出てくる。ある朝、レメディオスが青白い顔をしていて、周りは心配するんだけど、レメディオスは「大丈夫。むしろこんなに気分がいいのは生まれて初めてよ。」という。そうしたらとつぜん強い風が吹いて、シートと一緒にレメディオスの体が浮き上がって、そのまま昇天して消えてしまう。そんなとんでもないことが起きたのに、周りは「まああれだけ美人だったからねえ」と言って受け入れてしまう。そういうのを読んで、**どんなことでも起こりうるこの世界で、瑣末な事を気にしても仕方ないって思えるようになった**。**自分のやりたいことにこだわる自己実現よりも、世界、外界の存在そのものを肯定するようになった**。

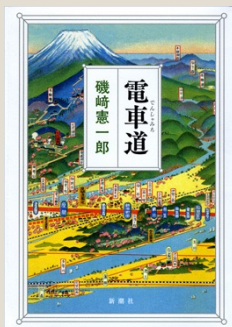
小説を書くことについて

Q. 小説を「読む」から、「書く」に変わったきっかけはありますか？

A. 若いときはポートの大会で優勝したいとか、サラリーマンとしての自分を評価してほしいなどの**自己実現**に重きを置いていた。けれど20代の最後から30代にかけて価値観が180度変わっていったような感じがあって、一番大きなきっかけは、**自分に子供ができたこと**なんだよね。今まで全然子供が可愛いと思わなかったのに、本当に娘が産まれたら信じられないくらい可愛かった。それで、人間は年を重ねていく過程の中で、**自分より他者の方が重要になっていく**のを実感したんだよね。そんな時期に『百年の孤独』のような本と出会ったというのは、**自分も小説を書いてみようかな**と思うきっかけになったと思う。世の中ってというのは、いいことも悪いことも、いろんなことが起こるけど、それをすべて含めて、世界が存続していくこと自体が素晴らしいんだということ、自己実現ではなく**外界を肯定する実践**として小説を書きたいと思って、自分も小説家になったような、後から振り返ってみるとそんな気がするんだよね。

Q. どのように小説を書いていますか？

A. 僕の小説の書き方は一寸変わっていて、あらかじめ考えている**小説の設計図は、一切ない**んだよ。**あるのは最初の一文だけ**。その一文にどういう一文を繋げたら面白いかっていう、そういう書き方。自分の意図とかメッセージを伝える媒体として小説を使うのではなく、小説の力を借りながら、自分という回路を通じて、小説の流れに乗っかりながら書いているような、そんな感じなんだよね。書いている最中の気持ちとしては、限りなく受け身。そういう書き方をすることで、結果的に、なんでこんなのができ上がっちゃったんだろう、という小説が完成するんだよね。**自己実現の対極にある書き方**、小説という散文芸術、芸術表現に奉仕する、その実践のような気がしている。



磯崎 憲一郎 先生の著書の一部
(すずかけ台図書館所蔵)

磯崎 憲一郎『終の住処』(新潮文庫刊)
磯崎 憲一郎『電車道』(新潮社刊)

読書について

Q. 学生には本を読んでもらいたいですか？

A. **年間に何十冊、何百冊も読む必要はない**、むしろそういう風に読まないほうがいいんじゃないかなと思っている。小説が必要な人は、小説を読めばいいんだけど。僕が小説から受け取ったような何かは、サッカーや将棋から受け取る人もいる。だから全員が全員本を読むべきだとは思わない。ただ、面白いとおもった本を見つけたら、**徹底的に深く読んだほうが良い**と思うんだよね。何回も読む、繰り返し読む方が僕はいいと思う。今の時代、広く浅く知識がある人、何でも知っている人のほうが優秀とされているような気がするんだけど、そんな薄っぺらい知識で勝負できるほど世の中は甘くない。

Q. では、読書とは何ですか？

A. 読書ってというのは、**読んでいる時間そのもの**なんだよ。読んでいる最中に湧き起こる**高揚、不安、気持ちのざわつき**。本って何なんだ？って言われたら、読書という経験の中にしかない何か。スキルや知識を身に付けるためとか、そんなさましい根性で本を読むな、と言いたいね。

東工大生へのメッセージ

Q. 東工大生へのメッセージをお願いします。

A. 実は今現役の小説家の中で文学部の創作学科出身の人って少ないんだよね。逆に**理系出身の小説家は多い**。例えば、この前の芥川賞にノミネートされた石田夏穂さんは東工大出身だし、円城塔さんは物理専攻で博士まで取っている。それこそ昔は森鷗外や安部公房もいるし。多分理系の学生には、文学への過剰なリスクってというのがないのが良いんだよね。だからのびのびと書くことができる。**東工大生の中にも小説を書きたいとひそかに思ってる人はいると思う**。そういう人は、孤独に、自分を信じて頑張ることが大事。ついでに、私は駐在員としてアメリカに行ったのもとても良い経験だったと思うので、**みんなも海外へ行くチャンスがあったら、積極的に行くことを勧めます**。

磯崎 憲一郎 先生、お忙しい中、ありがとうございました！